

海岸女学校における地理教育

齋藤 元子

《要旨》

青山学院女子短期大学のルーツである海岸女学校は、19世紀アメリカに発展した女子中等教育機関フィーメール・セミナリーをモデルとして創設された。フィーメール・セミナリーの先駆的指導者エマ・ウィラードは、地理教育を重視し、「地理は最初に学ぶ科学」という理念を全米に浸透させた。海岸女学校においても、その理念が継承され、地理は一年次の初学期に学ぶ科目としてカリキュラムに配置された。教科書は、当時アメリカで広く用いられていたコーネルの地理書が使われた。英語のテキストで地理を学んだのである。コーネルの地理書は、福澤諭吉が幕末に渡米した折にニューヨークで買い求めた書籍の一つであり、慶應義塾において使用されたのみならず、多くの官立男子中等学校にも普及していた。つまり、海岸女学校の地理教育は、男子中等教育機関と比べても、遜色のない内容であったといえる。

キーワード：フィーメール・セミナリー エマ・ウィラード 女性宣教師 地理教育 コーネルの地理書

1. はじめに

青山学院女子短期大学は、1874（明治7）年に米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会（The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church）が日本に派遣した女性宣教師ドーラ・スクーンメーカー（Dora Schoonmaker）により設立された女学校をルーツとしている。麻布でスタートした学校は、三田の地を経て、1876（明治9）年築地の外国人居留地に自前の校舎を完成させ、海岸女学校と名付けられた。

海岸女学校をはじめとして、明治期に来日した女性宣教師により設立された女学校は、19世紀アメリカに発展した女子中等教育機関であるフィーメール・セミナリー（female seminary）をモデルとしていた。フィーメール・セミナリーは、女性教師と女性宣教師の養成を目標に掲げ、それまでの女子中等教育が一部の富裕層子女を対象とした結婚に備えての教育に止まっていたのに対して、一般教養を重視し、自然科学系の諸科目をカリキュラムの中核に据えたことが特徴であった。とりわけ、地理は「最初に学ぶ科学」と位置づけられ、重要視された。

本稿では、フィーメール・セミナリーが地理教育を重んじた根拠を検証し、フィーメイ

ル・セミナリーをモデルとした海岸女学校において地理教育がいかに実施されたかを明らかにしたい。

2. フィーメール・セミナリー

フィーメール・セミナリーは、エマ・ウィラード (Emma Willard)、キャサリン・ビーチャー (Catharine Beecher)、メリー・ライオン (Mary Lyon) といった先駆的指導者により、19世紀はじめに誕生した。19世紀中葉のアメリカは、公立初等学校であるコモンスクールが普及し、大量の教師不足が生じていた。女性の教師は男性よりも安価に雇えることから需要が高まり、フィーメール・セミナリーは教師の養成機関として注目され、多くの卒業生を教師として世に送り出した¹。

例えば、1837年に創立されたマウントホリヨーク・セミナリーでは、開校後40年間は卒業生の70%が初中等教育機関の教師になっていた²。女性教師の給料は男性の半分以上であったが、1860年マサチューセッツ州では、初中等教育機関の教師の5分の4は女性だった。ニューイングランドでは、1820年から60年にかけて女性の4人に1人が教師を経験していた³。また1850年初頭ペンシルベニア州の公立小学校では、81人の男性教師に対して女性教師は646人であった⁴。つまり教師は中産階級の独身女性にとって、典型的な職業だったのである。女性海外伝道協会により宣教師に採用された女性は、フィーメール・セミナリーにおいて教師の資格を取得し、教師経験のある者が多かった。

最も教師が不足していた西部開拓地に、独身女性が教師として一人で赴任して行くこともまれではなかった。海外へ宣教師となって渡ることは、その延長として捉えられたとしても不思議ではない。給料の面を比較すると、日本へ派遣された女性宣教師の年間給与は六百ドル、男性宣教師は八百ドルで30%ほど安かった⁵。女性教師の給与が男性の半分以上であったのを考えると恵まれていた。宣教師に志願することは、堅固な信仰心に基づいているのは言うまでもないが、職業としての選択という見方もできる。伝道地において、女性宣教師は教師経験を生かし女子教育に積極的に取り組んだ。教育を通しての伝道を実践しようとしたのである⁶。

フィーメール・セミナリーの教育内容は、はじめにも述べたように、一般教養の重視であった。特に地理、物理、化学、天文といった科学諸科目が、カリキュラムの中核を占めていたことが特徴である。当時アメリカの男子中等教育機関は、ギリシャ語・ラテン語といった古典語教育に重きを置き、これらの科目を男性的な教科とみなして、女性が学ぶことに難色を示した。そこでフィーメール・セミナリーは、古典語に代わる教養科目として科学諸科目に着目し、カリキュラムの中心に据えたのである⁷。

フィーメール・セミナリーが地理を「最初に学ぶ科学」と位置づけ重視した背景には、教育目標として掲げた女性宣教師の養成が関係していたと考えられる。女性宣教師となって異教地に赴くことは、未開の地を探検する行為に類似している。よって、布教活動に役

立つ知識として地理の知識を身につけることは、女性宣教師に求められた一技能の習得を意味していたといえる。

3. エマ・ウィラードの地理教育

フィーメール・セミナリーの創設者のなかでも、エマ・ウィラード (Emma Willard) は、とりわけ地理教育に熱心で、自ら地理のテキストを執筆し、各地の学校を訪問して、模範授業を行った⁸。ウィラードは、19世紀初期、女子教育の推進運動を展開し、自らニューヨーク州にトロイ・フィーメール・セミナリーを開校するなど、女子教育のパイオニアとして有名である。また彼女は、地理教育の推進者として、地理教科書 *A System of Universal Geography on the Principles of Comparison and Classification* (1822)、*Geography for Beginners* (1826)、*Ancient Geography* (1833)、*Astronography; or, Astronomical Geography* (1854) を出版した⁹。

ウィラードは女子中等教育における地理の重要性を強調した。地理を学ぶことは、確かな学識と健全な判断力の形成を促し、様々な物事に対する深い理解をもたらすものであるとウィラードは確信していた。加えて、地理の学びは、物事を比較する力・要約する力を実践的に養うことができるとも述べている¹⁰。

ウィラードを地理教科書の執筆へと駆り立てたより具体的な要因は、当時流布していた教科書への強い不満であった。それは、他の能力を犠牲にして記憶力のみを養うような教育法に対する不満であり、また、世界の主要都市の位置関係がロンドンからの距離で示されているといった不満でもあった¹¹。

ウィラードは、地理教育は暗記教育ではなく、論理的に考える力を養うべきものであると主張し、生徒の年齢と理解度の適合した方法で教授することを唱導した¹²。ウィラードの *Geography for Beginners* (1826) (図1) には、“or the instructor’s assistant in giving first lessons from maps in the style of familiar conversation accompanied with an atlas” という長いサブタイトルがついている。つまり本書は、地理を初めて学ぶ子どもの教科書であると同時に、将来教師となって地理教育にたずさわるフィーメール・セミナリーの学生にとっての教則本でもあった。ウィラードは、当時主流であった単に地名だけを暗記させる方法に対して、地図や図表を多用し、視覚に訴える方法を試みた。また、幼い子どもには堅苦しい文章よりも会話体のほうが好ましいと考え、親子の対話形式を採用した¹³。

19世紀半ばには、百校以上のフィーメール・セミナリーが存在した¹⁴。ウィラードの教科書は、東部を中心に絶大な影響力を持っていた¹⁵。地理は最初に学ぶべき科学であるという意識が、フィーメール・セミナリーの間に広く浸透し、1840年頃までにはほとんどのフィーメール・セミナリーで地理が教えられていた¹⁶。

明治期に来日したアメリカ人女性宣教師は、その多くがフィーメール・セミナリーの出身である¹⁷。彼女たちは、フィーメール・セミナリーにおいて、地理を学び、また、地理

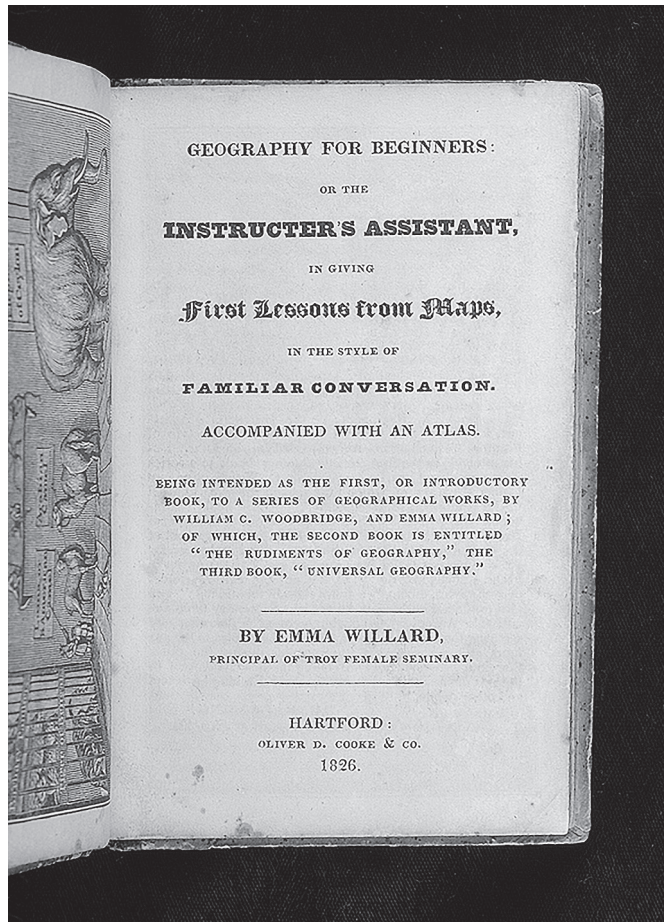


図1. *Geography for Beginners* (1826) の表紙
Duke University Exhibits
(<https://exhibits.library.duke.edu/exhibits/show/baskin/item/4105>) より

教授法をも習得していた。このことは、女性宣教師が地理の専門教育を受けた者であったことを意味する。

4. 海岸女学校の教授科目

海岸女学校は居留地内に設立されたため、開校届など公式の書類を政府に提出する必要がなかった。しかし、1888(明治21)年女学校部門を東京英和女学校と改名し、青山に移転させるにあたり、初めて東京府に「私立学校設置御許可願」¹⁸が提出されている。それに添付されている課程表や教科書用図書表は、それまで海岸女学校で使用していたものを記したと見るのが妥当である。よって、これをもって、海岸女学校の教育内容を示す史料とみなす。

課程表に示された科目は、英語・和漢学・数学・地理・歴史・天文・博物・動物・植物・地質・物理・化学・生理・衛生・倫理・心理・経済・政治・教育・画法・音楽・聖書・裁縫・割烹・作法であった。これをその他のアメリカ人女性宣教師設立女学校で当時教えられていた科目と比較をしてみよう。活水女学校、北陸女学校など、現存する複数のアメリカ人女性宣教師設立女学校の課程表を見ると、いずれの女学校も、海岸女学校とほぼ同じ科目が教授され、英語・国語・裁縫・作法のみならず、複数の自然科学系・社会科学系の科目が含まれていた¹⁹。

海岸女学校で使用されていた教科書は、「私立学校設置御許可願」中の教科書用図書表によれば、和漢学関係を除いて、大半がアメリカの教科書であった。教科書用図書表中の洋書教科書の図書名・出版年・著者名を以下に示す。

英語ノ部	読本第四	一千八百八十四年	バーアース
	読本第五	一千八百七十一年	エペス サージェント
	修辞学	一千八百八十一年	スキントン
	文法作文書	一千八百マ	カール
地理ノ部	地理書	一千八百六十七年	コルネル
歴史ノ部	米国史	一千八百八十一年	グードリッチ
	英国史	一千八百八十四年	デッチンズ
	聖書史	一千八百八十年	スミス
	万国史	一千八百八十一年	パーレー
数学ノ部	代数	一千八百七十七年	ロビンソン
博物ノ部	植物学	一千八百七十三年	ユーマン
	金石学	一千八百八十四年	テンネース
生理ノ部	人身生理	一千八百七十二年	スチール
物理ノ部	物理学	一千八百七十八年	スチール
化学ノ部	化学	一千八百七十三年	スチール
修身ノ部	倫理学	一千八百七十二年	ウェーランド
	倫理学	一千八百七十五年	ピンネー
心理ノ部	心理学	一千八百五十四年	ウェーランド
天文ノ部	天文学	一千八百八十四年	スチール

上記の教科書は、海岸女学校のほかにも、長崎の活水女学校、名古屋の金城女学校、金沢の金沢女学校、横浜の共立女学校・フェリス女学校など、複数の女性宣教師設立女学校において、使用されていた²⁰。このことは、女性宣教師により設立された女学校には、アメリカの教科書を用いて、自然科学系・社会科学系の諸科目を教授するという共通点があったことを示している。言い換えれば、一般教養の重視というフィーメール・セミナ

リーの姿勢は、日本においても十分に発揮されていたのである。キリスト教系女学校への強い対抗意識を持って設立された一仏教系女学校では、読書・算術・手芸・修身・図画・生花・点茶が教授科目であった²¹。この比較からも、女性宣教師により設立された女学校の教育水準の高さを知ることができる。

また、上記の中で、コーネル、グードリッチ、パーレー、ウェーランドの著書は、福澤諭吉が幕末に渡米した折に、ニューヨークで大量に買い求めた書籍のなかにも含まれていた²²。福澤が仕入れた書籍は、慶応義塾で用いられたのみならず、全国に普及し多数の官立男子中等学校でも用いられていたとの記録がある。明治初期の英語教師の最多供給源は、慶応義塾であり、同塾出身者が教師として各地に赴任した際、同一本を教科書として使用したためと推察される²³。海岸女学校は、慶応義塾をはじめとする多くの男子中等教育機関と共通の教科書を使用していたということになる。つまり、海岸女学校の教育内容は、慶応義塾をはじめとする男子中等学校と比べても、遜色のないものであった。今日的な表現を用いるならば、ジェンダー格差のない教育を実践したのである。

5. コーネルの地理書による地理教育

海岸女学校は、フィーメール・セミナリーにならい、9月を新年度の開始とし、秋期・冬期・春期の三期制をとっていた。そして、地理は、一年次の秋期、つまり最初に学ぶ教科として、国語・英語・代数・物理・博物学とともに、課程表に配置されている²⁴。

海岸女学校は、前章で述べたように、築地の居留地内にあったため、学校運営関連の公文書は残されていないが、女性宣教師の書簡や卒業生の随想のなかに、地理教育に関連する次のような記録が認められる。開校期には、創立者スクーンメーカーが地理を担当し、地図を活用した授業が早くから実施されていた²⁵。また、1881（明治14）年9月、火災で焼失した校舎が再建された際には、女性宣教師のアメリカでの教師時代の教え子から、数枚の大判地図と地球儀が贈呈され、貴重な教材を得たことを女性宣教師たちは喜んでいる²⁶。1883（明治16）年には、前年アメリカ留学より帰国した津田梅子が、海岸女学校で地理を教えている²⁷。課程表における地理の位置づけに加えて、上記のエピソードは、海岸女学校が地理教育を重視していたことをうかがわせる。

前章で紹介したように、海岸女学校では地理の教科書として、コーネルの地理書が使われていた²⁸。東京府に提出された教科用図書表には「地理ノ部 地理書 一千八百六十七年 コルネル」と記載されている。コーネルの地理書は、19世紀後半のアメリカで最も普及していた地理教科書の一つである。海岸女学校のほか、香蘭女学校、共立女学校、桜井女学校、喜田英和女学校、明治女学校の5つのキリスト教系女学校で、コーネルの地理書を使用していたことが確認できる²⁹。また、海岸女学校を退職した後、もと宮中女官の下田歌子が開いた桃夭女塾に、伊藤博文の紹介で職を得た津田梅子も、コーネルの地理書を用いて授業を行っている³⁰。

コーネルの地理書は、一冊の教科書ではない。*Cornell's First Steps in Geography* (1858)・*Cornell's Primary Geography* (1854)・*Cornell's Intermediate Geography* (1855)・*Cornell's Grammar-School Geography* (1858)・*Cornell's High-School Geography* (1856) という5種類のシリーズ教科書と自然地理を扱った *Cornell's Physical Geography* (1870) がある。この中で、海岸女学校の使用教科書表に示された1867年版があるのは、*Cornell's Primary Geography*・*Cornell's Intermediate Geography*・*Cornell's High-School Geography* の3書である³¹。

ちなみに、上述した他のキリスト教系女学校では、東京府に提出された開学届によると、香蘭女学校が「コルネル 中地理書」、明治女学校が「コルネル 地理初歩」を使用していた³²。共立女学校では、今日横浜共立学園に現物が保存されている *Cornell's First Steps in Geography* と *Cornell's Primary Geography* が用いられた。「コルネル 中地理書」は *Cornell's Intermediate Geography* と考えられ、「コルネル 地理初歩」は *Cornell's First Steps in Geography* あるいは *Cornell's Primary Geography* であろう。

他の女学校の状況から推測すると、海岸女学校でも、*Cornell's High-School Geography* ではなく、1867年版の *Cornell's Primary Geography* か *Cornell's Intermediate Geography* を用いたと考えられる。よって、この2書を海岸女学校で使用された地理教科書とみなす。まずは、シリーズ教科書における *Cornell's Primary Geography* と *Cornell's Intermediate Geography* の位置づけを明らかにするために、6種類のコーネルの地理書すべてを紹介する。

1) コーネルの地理書

コーネルの地理書は、最初に *Cornell's Primary Geography* (以下 *Primary G.* と記す)、*Cornell's Intermediate Geography* (以下 *Intermediate G.* と記す)、*Cornell's High-School Geography* (以下 *High-School G.* と記す) の3書がシリーズとしてまず発行された。*Primary G.* は初等学校用、*Intermediate G.* は *Primary G.* 修了者用、*High-School G.* は中等学校用に書かれた。数年後に *Primary G.* よりもさらに入門的な *Cornell's First Steps in Geography* (以下 *First Steps in G.* と記す) と *Intermediate G.* の次のレベル、あるいはこれに代わるテキストとして *Cornell's Grammar-School Geography* (以下 *Grammar-School G.* と記す) が出版された。また1870年には、5種類のシリーズ教科書とは別に、*Cornell's Physical Geography* (以下 *Physical G.* と記す) が、*High-School G.* と同じく、中等学校向けに出された。各書の内容を概説すると以下ようになる³³。

First Steps in G. (頁数68) は、問答法により「地球」「海洋」「島」といった地理用語の定義と地図の読み取り方を学習する2部構成になっている。*Primary G.* (頁数98) は、同じく問答法を用いて、地球の概略を学ぶ入門レッスン、自然地理に使われる用語の定義、地図の読み取り方の3部から成っている。*First Steps in G.* と *Primary G.* は、内容的にかなり重複しているが、*First Steps in G.* の記述はより単純であり、平易な単語が使用され

ている。*Intermediate G.* (頁数100) と *Grammar-School G.* (頁数122) は、政治地理・自然地理・数理地理に使われる用語の定義、地図解説、世界とアメリカ国内の地誌、地図作成法などから成る。*High-School G.* (頁数405) は、地誌、数理地理、自然地理の3部から構成されている。第1部の地誌が大半を占め、アメリカ諸州と世界各国の自然および人文地理的特徴が記されている。*Physical G.* (頁数104) は、地球の概略に始まり、地形、地質、気候、動植物・天然資源の分布、人種、アメリカの自然の特徴などが論じられている。*High-School G.* と *Physical G.* は、中等学校用に書かれたため、内容が他の4書に比べて、かなり高度である。

コーネルの地理書すべてに共通する特徴は、まず地理の概念や用語の定義を示した上で、地図を参照しながら、世界の各地域について学習するというスタイルである。コーネルの地理書の中で最初に出版された *Primary G.* の序文において、著者はシリーズ教科書執筆の動機を「数年間に及ぶ公立学校教師の経験から、現在普及している地理教科書を検証した結果、地理的知識が記憶に残らない原因は以下の点にあることを突き止めた。第一に定義の定まっていない用語を乱用している。第二に系統だった記述がなされていない。第三に地図が不明瞭である。つまり、今までの教科書にはシステムが致命的に欠如している。地理という興味深い科学を、無味乾燥な状況から救い出すために、段階を踏んだ教授法に基づき、学習者の関心を持続させながら、容易に忘れられることのない地理的知識を身につけさせることの必要性を痛感した」と述べている。

コーネルは、改革のキーワードとして“one thing at a time”という言葉掲げている。このキーワードは、直訳すると「一つのことは一度に」となる。その意味は、各書を丹念に読むと「一つの事柄を一つずつ、余分なことを差し挟まずに、教える。さらに、関連する事柄は時を置かずに、連続性を持って教える」ということであつたと解釈できる³⁴。コーネルの提示した段階的教授法とは、海岸女学校で使用された *Primary G.* あるいは *Intermediate G.* においては、具体的にどのような形で示されていたかを明らかにしたい。

2) Cornell's Primary Geography

Primary G. (図2・表1) は、116のレッスンから成り、1から8は地球の概略を学ぶ入門レッスン、9から12は自然地理に関する用語の定義、13以降は地図の読み取り学習となっている。最初のレッスン1では、地球と地理について説明され、地理は「地球の表面を説明する科学である」と定義されている。表中の学習事項をみると、レッスン5～8とレッスン13～31の二箇所において、西半球と東半球の学習が組まれている。この点に着目して、コーネルの教授法を考察してみたい。

まずレッスン5～8においては、西半球と東半球がどのような大陸によって構成されているかを学習する。掲載されている西半球の地図には、北アメリカと南アメリカ、東半球の地図には、アフリカ・ヨーロッパ・アジア・オーストラリアが示され、大陸の名称以外には何も記載されていない。直前のレッスン3～4で学習した東西南北の知識を使って、各大

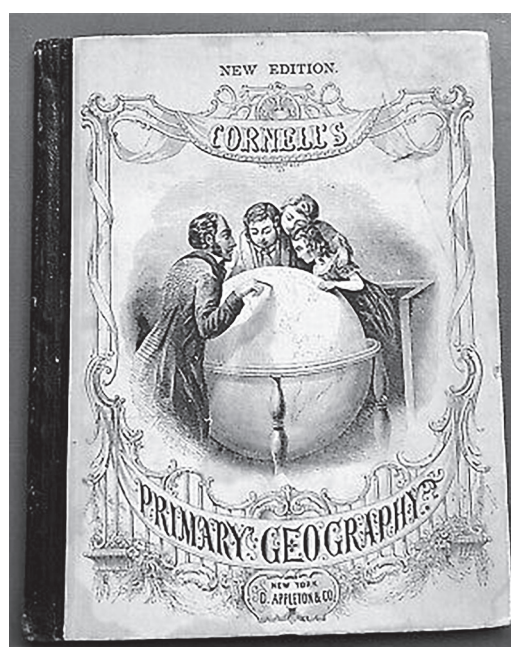


図2. Cornell's Primary Geography の表紙 (筆者所蔵)

表1. Cornell's Primary Geography の内容

レッスン番号	学習事項	レッスン番号	学習事項
1	地球、地理	86	アメリカ合衆国
2	地図、半球	87~93	東部州
3~4	東西南北	94~98	中部州
5~8	西半球、東半球	99~104	南部州
9	島、半島、地峡	105~109	西部州
10	岬、海岸、山	110	東部諸州の概説
11	海洋、港、湾、海峡	111	中部諸州の概説
12	湖、河川	112~113	南部諸州の概説
13~20	西半球	114~115	西部諸州の概説
21~31	東半球	116	オセアニア
32~41	北アメリカ		
42~51	南アメリカ	地理用語の発音表	
52~65	ヨーロッパ		
66~75	アジア		
76~85	アフリカ		

Cornell, S. S. 1857. *Cornell's Primary Geography*. New York: D. Appleton and Company. より作成

陸の位置関係を把握する問答が、本文として進行する。一方、レッスン13~31では、同じく西半球と東半球の地図が掲載されている。しかし、レッスン5~8に示された地図とは異なっている。レッスン13~31では、すでにレッスン9~12において island (島)、mountain (山)、ocean (海洋)、river (河川) といった地理用語を学習しているので、海洋名や主

要山脈・河川などの名称が記されている。本文では、大陸と海洋の位置関係や河川の流路などについて、方位を用いて答える問答が並んでいる。

レッスン5～8とレッスン13～31に掲載された地図は、どちらも東西半球の地図ではあるが、情報量には格段の差がある。そして、その情報量の差は学習段階の差を示すものである。各地図には、それまで学習した事柄と今まさに学ぼうとしている事柄だけが記載されている。レッスン5～8の段階では、海洋に関する学習はなされていない。よって、地図の海域の部分には何も記されていない。レッスン13～31の地図においては、先に学習した自然地理に関する用語が組み込まれ、日本も Japan Islands として登場する。コーネルは従来の教科書に掲載されている地図について「学習レベルと関連性のない、生徒にとっては不可解な名称や記号を覚えることにじれったいほどの時間を浪費している」と批判しており、段階的に地図を詳細化することにより、地図に対する親しみと地図を読み取る能力を養っていこうとした意図が認められる。

Primary G. は、東西南北という方位感覚と自然地理の用語を、地図を用いて習得することが主要な目標であったといえる。方位と用語の定義が、レッスン12までに示され、レッスン13以降はその応用として、地図上でそれらがどのように示されているかを読み取る学習が展開されている。レッスン13以降で新たに登場する用語は、city (都市) と capital city (首都) の2語のみである。レッスン32以降の大陸別地図とアメリカの国内地図では、それまでに学習した用語と各国 (州) の首都や大都市が示されている。本文では、国や州ごとの簡単な説明が記されているが、その内容は主に地図上の位置と自然に関するものであり、人文地理の範疇に属する政治・経済・文化などに関する事柄には、ほとんど言及していない。

3) *Cornell's Intermediate Geography*

Intermediate G. (図3・表2) は、*Primary G.* 修了者向けに書かれた教科書である。127のレッスンから構成されている。最初のレッスン1では、*Primary G.* と同じく地理の定義を明らかにし、政治地理・数理地理・自然地理の三分野を有することが示されている。「政治地理は統治を目的として人間により形成された国家・都市・集落などを扱い、数理地理は子午線など地図上の様々な線や環を扱い、自然地理は大気や地表のすべての動植物を扱う」と定義している。

レッスン2で示されている政治地理の用語には、empire (帝国)、republic (共和国)、state (国家)、town (町)、city (都市)、capital (首都)、metropolis (大都市)、commerce (商業)、inhabitant (住民) がある。また、国家の社会状況は、芸術・科学・産業が高度に発展した enlightened (最文明国)、ある程度発展した civilized (文明国)、不十分な half-civilized (半文明国)、無知な savage (未開国) の4段階に分類できるとしている。ただし、コーネルは、それを各国に当てはめることまではしていない。これらの内容から見て、政治地理とは、狭義の政治のみを扱うのではなく、今日の人文地理といえるもので

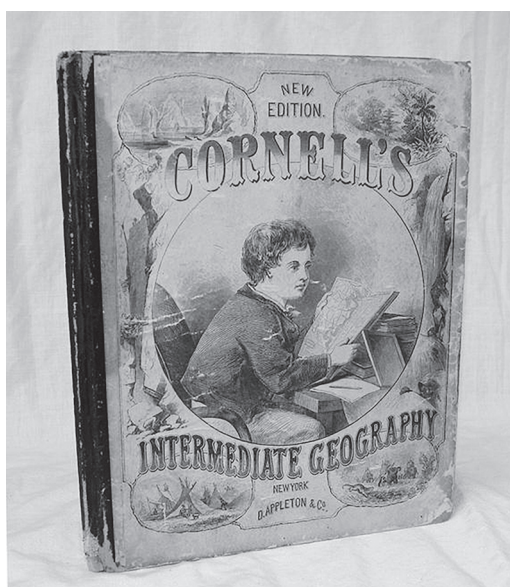


図3. Cornell's Intermediate Geography の表紙 (筆者所蔵)

表2. Cornell's Intermediate Geography の内容

レッスン番号	学習事項
1	地球とは、地理とは、地理の種類
2	政治地理で使用される用語の定義
3～7	数理地理で使用される用語の定義
8～9	自然地理で使用される用語の定義
10～46	北アメリカ
47～60	アメリカ合衆国
61～62	西インド諸島
63～71	南アメリカ
72～95	ヨーロッパ
96～104	アジア
105～112	アフリカ
113～116	オセアニア
117～121	自然地理の要約
122～125	復習問題
126～127	地図作成
表	主要国の面積と人口、主要都市の人口、主要山脈、河川、湖、島
統計表	アメリカ合衆国州別農業統計 国際通貨比較 主要国の輸出高

Cornell, S. S. 1872. *Cornell's Intermediate Geography*. New York: D. Appleton and Company. より作成

ある。

数理地理に関するレッスン3～7では、上述した定義が示すように、緯線・経線・赤道な

どについて学習する項目である。*Primary G.*で着目した東西半球の地図がここにも掲載されているので、比較をしてみたい。*Intermediate G.*の地図には、*Primary G.*ですでに学習した自然地理の用語に加えて、緯線・経線・赤道が描かれている。学習した事柄のみを地図に記載するという方法は、*Primary G.*から*Intermediate G.*へと継続されていることが認められる。レッスン8～9の自然地理の用語に関しては、*Primary G.*で学習した定義の復習が主であるが、新たに hill (丘)、plain (平野)、valley (谷)、firth (河口)、archipelago (群島) が用語として登場している。

*Intermediate G.*の目標は、政治地理・数理地理・自然地理の用語を習得することであり、学習方法は *Primary G.*と同様に、まず用語の定義を示し、その後のレッスンでそれらを応用する形態がとられている。レッスン10以降の応用学習では、*Primary G.*と同様に、大陸別地図とアメリカの国内地図が示されているが、本文の解説は *Primary G.*に比べて詳細になっている。*Primary G.*における国や州の説明は、地図上の位置と簡略な自然地理的特徴を記したものであったのに対して、*Intermediate G.*の説明は、それぞれの国(州)ごとに、“地理的な位置”“地形”“土壌・気候・植生”“住民・産業”“主要都市”という項目を立てて解説している。政治地理・数理地理・自然地理の三分野を網羅し、特に政治地理という人文地理的な視点が加わった点に、*Primary G.*との違いが顕著である。

以上、*Primary G.*から*Intermediate G.*へと続くコーネルの段階的教授法をみてきた。*Primary G.*は、東西南北という方位感覚と自然地理の用語を、地図を用いて習得することを目標としている。一段階上の *Intermediate G.*は、自然地理に加えて、政治地理・数理地理の用語を習得することを目標としている。*Primary G.*において定義づけされた用語の量は、多いものではない。コーネルはそれらを地図上に繰り返し示すことを通して、その形態や特徴を視覚的に把握させようと試みている。それまで学習した事柄と今まさに学ぼうとしている事柄だけを地図に記載するという姿勢は、*Primary G.*で完結することなく、*Intermediate G.*へと継続され、シリーズ教科書としての一貫性が認められる。

*Primary G.*あるいは *Intermediate G.*を用いた海岸女学校の地理教育は、英語による地理用語の段階的な習得を目指す地理教育であったといえることができる。つまり、海岸女学校の生徒たちは、マクロなスケールから徐々にミクロなスケールへと展開していく地図を参照しながら、教師である女性宣教師との問答を繰り返すことにより、様々な地理的事象を示す英単語を習得していったとみることができる。

4) 著者コーネルについて

海岸女学校が教科書として使用したコーネルの地理書の著者は、サラ・ソフィア・コーネル (Sarah Sophia Cornell) という女性である。コーネルに関しては、地理書の中に著者名とともに記された公立学校教師と The American Geographical and Statistical Society³⁵の corresponding member という肩書き以外、その経歴については明らかにされていない。

1882年に出版された *Daughters of America*³⁶は、19世紀に活躍したアメリカの女性を紹介した書であるが、この中の教育者の章に、コーネルも取り上げられている。それによると、コーネルは革新的な地理教育システムを編み出し、その後の公立学校用地理教科書に多大な影響を及ぼした女性であった。コネチカット州ニューロンドンに生まれ、15歳で教師となり、長年公立学校の校長を務めた後、教科書の執筆に専念し、1875年ニューヨーク州オウエゴで死去した。

しかし、地理教育研究者 Pittser が *Daughters of America* のコーネルに関する記述を検証するため、コネチカット州とニューヨーク州オウエゴの歴史協会、コロンビア大学の教員大学図書館などに、コーネルの出生や死亡、職歴に関する調査を依頼したところ、いずれからもコーネルの存在を証明できる記録は発見できなかったということである³⁷。

筆者は、The American Geographical and Statistical Society の学会誌に、コーネルの投稿論文が掲載されていないか調査を行った。だが、同学会誌である *Bulletin of the American Geographical and Statistical Society* (1852-56)、*Journal of the American Geographical and Statistical Society* (1859-60,1870)、*Proceedings of the American Geographical and Statistical Society* (1862-64)、*Journal of the American Geographical Society of New York* (1872-1900)、*Bulletin of the American Geographical Society* (1901-1915) のいずれにもコーネルの名前は見出せなかった³⁸。

6. おわりに

築地居留地において明治期に展開された海岸女学校の地理教育は、注目すべき二つの優れた特徴を有していたと結論づけることができる。

一点目は、男女別学が規定されていた明治期の中等教育にあって、男子中等学校のみで教えられていた地理を、最重要科目の一つと位置づけ、男子中等学校と同一の教科書を用いて教授した点である。つまり、性差のない教育が地理教育を通して実践されたということである。

二点目は、アメリカで出版された英語の地理教科書を用い、教師である女性宣教師との問答を通して、地理的知識ならびに英語力を身に着けるというスタイルは、正に実践的なバイリンガル教育の嚆矢であったといえよう。

2022年度より、高等学校では地理が「地理総合」の名称のもと、実に49年ぶりに必須化される。日本の近代地理教育史の流れにおいて、海岸女学校にて提唱された「地理は最初に学ぶ科学である」との理念は、間もなく開始される地理の必須授業へとつながっている気がしてならない。

- 1 齋藤元子 1999. 19世紀後半アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動. お茶の水地理 40: 33-38. 36頁.
- 2 Simmons, A. 1976. Education and ideology in nineteenth-century America: Response of educational institutions to the changing role of women. In *Liberating Women's History*, ed. B. A. Carroll, 115-126. Chicago: University of Illinois Press. p.123.
- 3 有賀夏紀 1988. 『アメリカ・フェミニズムの社会史』 勁草書房. 51頁.
- 4 Simmons, A. 1976. Education and ideology in nineteenth-century America: Response of educational institutions to the changing role of women. In *Liberating Women's History*, ed. B. A. Carroll, 115-126. Chicago: University of Illinois Press. p.117.
- 5 小檜山ルイ 1992. 『アメリカ婦人宣教師 ー来日の背景とその影響ー』 東京大学出版会. 142頁.
- 6 齋藤元子 2009. 『女性宣教師の日本探訪記 ー明治期における米国メソジスト教会の海外伝道ー』 新教出版社. 42頁.
- 7 Tolley, K. 1996. Science for ladies, classics for gentlemen: A comparative analysis of scientific subjects in the curricula of boys' and girls' secondary schools in the United States, 1794-1850. *History of Education Quarterly* 36-2: 129-153.
- 8 Goodsell, W. ed. 1970. *Pioneers of women's education in the United States —Emma Willard, Catharine Beecher, Mary Lyon—*. New York: Ams Press. (reprint of 1931). pp.15-42.
- 9 Pittser, S. E. 1999. Early women geography educators, 1783-1932. *Journal of Geography* 98: 302-307. p.303.
- 10 Osborn, C. 2016. Emma Hart Willard: Pioneering Geography Educator. Worlds Revealed Geography & Maps at The Library of Congress.
<https://blogs.loc.gov/maps/2016/03/emma-hart-willard/> (2021年9月10日最終閲覧)
- 11 Goodsell, W. ed. 1970. *Pioneers of women's education in the United States —Emma Willard, Catharine Beecher, Mary Lyon—*. New York: Ams Press. (reprint of 1931). p.83;
Pittser, S. E. 1999. Early women geography educators, 1783-1932. *Journal of Geography* 98: 302-307. p.303.
- 12 Goodsell, W. ed. 1970. *Pioneers of women's education in the United States —Emma Willard, Catharine Beecher, Mary Lyon—*. New York: Ams Press. (reprint of 1931). pp.83-84.
- 13 Goodsell, W. ed. 1970. *Pioneers of women's education in the United States —Emma Willard, Catharine Beecher, Mary Lyon—*. New York: Ams Press. (reprint of 1931). pp.83-84.
- 14 Woody, T. 1980. *A history of women's education in the United States, Vol. 1*. New York: Octagon Books. (reprint of 1929). p.418.
- 15 Nelson, M. R. 1987. Emma Willard: pioneer in social studies education. *Theory and Research in Social Education* 15-4: 245-256. p.252.
- 16 Woody, T. 1980. *A history of women's education in the United States, Vol. 1*. New York:

- Octagon Books. (reprint of 1929). p.415.
- 17 明治中期以降は、フィーメール・セミナリーよりもさらに上級の師範学校出身者が増加してくる。クランメル, J. W. 編 1996. 『来日メソジスト宣教師事典1873-1993年』 教文館.
- 18 青山学院資料センター所蔵「明治二十一年九月二十四日付 東京府知事高崎五六男爵宛東京英和女学校設置願」
- 19 活水学院百年史編集委員会編 1980. 『活水学院百年史』 活水学院. 42頁; 北陸五十年史編集委員会編 1936. 『北陸五十年史』 北陸女学校. 33頁.
- 20 東京都編 1961. 『都史紀要九 東京の女子教育』 東京都. 131頁, 137頁, 142-144頁, 148頁, 153頁; 秋枝蕭子 1963. キリスト教女子教育研究のしおり —明治時代プロテスタント系女学校について— 文芸と思想 25: 51-65. 61頁; 金城学院 1970. 『金城学院80年史』 金城学院. 6頁; 番匠育子 1981. 創設期の金沢女学校とアメリカの Western Female Seminary. 教育学論集 1: 15-32. 30頁; 福岡女学院百年史編集委員会編 1987. 『福岡女学院百年史』 福岡女学院. 1105頁; 『横浜共立学園120年の歩み』 編集委員会編 1991. 『横浜共立学園120年の歩み』 横浜共立学園. 115頁; 鈴木美南子 2002. アメリカ改革派教会外国伝道局年次報告におけるフェリスの記事 (1). あゆみ 48: 15-22. 22頁.
- 21 齋藤元子 2004. 海岸女学校 —青山学院の源流—. 築地居留地研究会編『近代文化の原点 築地居留地 Vol.3』 亜紀書房. 93-102. 97頁; 齋藤元子 2019. 明治期の女子教育と海岸女学校・東京英和女学校. 青山学院資料センターだより 21: 2-3. 3頁.
- 22 金子宏二 1979. 『藩学養賢堂蔵洋書目録』について —慶応三年福沢諭吉将来本—. 早稲田大学図書館紀要 20: 98-113. 108-112頁.
- 23 池田哲郎 1968. 英語教科書. 日本の英学100年編集部編『日本の英学100年 明治編』 358-378. 研究社出版. 362頁.
- 24 青山さゆり会編 1973. 『青山女学院史』 青山さゆり会. 107頁.
- 25 『青山女学院校友會會報』第三十八号, 創立六十周年記念号, 1934年, 99頁.
- 26 *Heathen Woman's Friend*, Vol.13-4, 1881, p.78.
- 27 Furuki, Y., Althaus, M., Hirata, Y., Ichimata, T., Iino, M., Iwahara, A. and Ueda, A. eds. 1991. *The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother*. New York & Tokyo: Weatherhill. p.70.
- 28 海岸女学校の予備科である尋常小学校・高等小学校課程のうち、尋常小学校では、日本語の地理教科書が用いられた (青山さゆり会編 1973. 『青山女学院史』 青山さゆり会. 116頁)。本稿は、女子中等教育機関としての海岸女学校に着目するため、予備科は研究対象から除外した。
- 29 ここでは、キリスト教系女学校として、女性宣教師設立女学校のほか、明治女学校など日本人キリスト教者により設立された女学校を含めた。東京都編 1961. 『都史紀要九 東京の女子教育』 東京都. 137頁, 165頁; 『横浜共立学園の120年』 編集委員会編 1991. 『横浜共立学園の120年 1871-1991』 横浜共立学園. 120頁; 東京都立教育研究所編 1971. 『東京教育史資料大系 第二巻』 東京都立教育研究所. 460頁; 東京都立教育研究所編 1972. 『東京教育史資料大系 第四巻』 東京都立教育研究所. 237頁.
- 30 Furuki, Y., Althaus, M., Hirata, Y., Ichimata, T., Iino, M., Iwahara, A. and Ueda, A. eds. 1991. *The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother*. New

- York & Tokyo: Weatherhill. p.70.
- 31 Pittser, S. E. 1997. *Women in geography education, 1783 to 1932*. Doctoral dissertation, Kansas State University. p.243.
- 32 東京都編 1961. 『都史紀要九 東京の女子教育』東京都. 137頁, 165頁.
- 33 考察には、*First Steps in G.* (1876・第2版)、*Primary G.* (1857・第2版)、*Intermediate G.* (1872・第2版)、*Grammar-School G.* (1870・第2版)、*High-School G.* (1860・第1版)、*Physical G.* (1883・第1版)を使用した。
- 34 齋藤元子 2009. コーネルの地理書の幕末・明治初期の日本への影響. お茶の水地理 49: 27-48. 31頁.
- 35 The American Geographical and Statistical Society は、1851年に成立したアメリカで最初の地理学関係の学会である。
- 36 Hanaford, P. A. 1882. *Daughters of America, or, women of the century*. Augusta, Maine: True and Company. pp. 519-520.
- 37 Pittser, S. E. 1997. *Women in geography education, 1783 to 1932*. Doctoral dissertation, Kansas State University. pp.241-243.
- 38 調査には、Brooks, A. A. 1918. *Index to Bulletin of the American Geographical Society 1852-1915*. New York: The American Geographical Society. を用いた。同学会誌は、今日の *Geographical Review* (1916-) に至る。

Geography Education at Kaigan Jogakko

Motoko SAITO

Kaigan Jogakko was the origin of Aoyama Gakuin Women's Junior College and was modeled after female seminaries which were middle schools for women in 19th century America. Most of the female missionaries who came to Meiji Era Japan graduated from such seminaries.

Female seminaries emphasized science, beginning with geography as the first scientific subject to study. Emma Willard, a founder of one of the female seminaries, was especially interested in teaching geography. She presented geography lectures at many schools using textbooks she herself had authored. Consequently, the female missionaries learned geography as well as methods of teaching geography at the seminaries.

Like the female seminaries, Kaigan Jogakko prioritized geography as the first scientific subject to study and did so using Cornell's geography textbooks which had been widely used in America. The textbooks were also quite popular at middle schools for boys in Japan.

Kaigan Jogakko was one of a number of pioneering schools providing geography education for women. Accordingly, it can be said that Kaigan Jogakko made a great contribution to both geography education and gender equality in Meiji Era Japan.

Keywords: female seminary, Emma Willard, female missionaries, geography education, Cornell's geography textbooks
